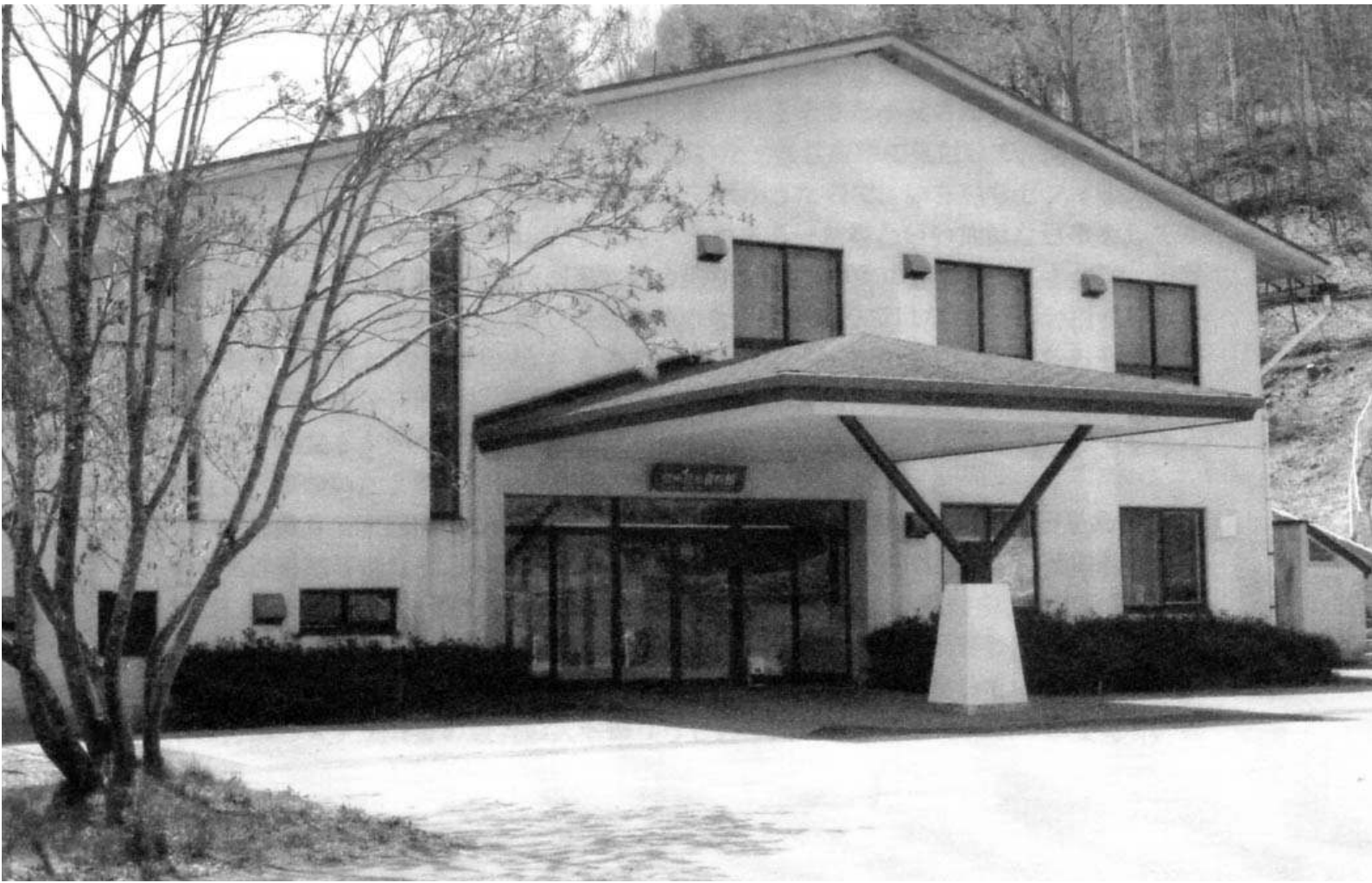
# 信州昆虫資料館報

No.11

2013.4



# ２０１３年　スケジュール

ようやく暖かい春になりました。
本年もよろしくお願い申し上げます。

４．２０（土）　午前１０時
春のオープン

４．２６（金）～５．３０（木）
「蝶のポスター展」開催
蝶の民俗館（須坂市）館長で、チョウと人間の研究をされてきた
今井彰さん蒐集の、蝶がかかわっている映画のポスター展です。
当館主催/日本昆虫協会長野支部・青木村教育委員会後援

５．２（木）　午後１時～
今井彰さんのお話会開催（於・館講義室）
飛翔する蝶に託した、興味深いお話しが聴けます。
民俗館主宰の今井さんならではのお話しをお楽しみに。
今井彰氏：日本昆虫協会長野支部役員他
著書に「鎌倉蝶」「羅浮山ゆらり」「帝揚羽蝶命名譯」「地獄蝶・極楽蝶」
「一蝶百楽」他専門誌に多数執筆

６．２（日）　午後１時～
当館で村の郷土史家**沓掛貞人**さんに、養蚕のお話を聴いた後、
「風穴（蚕の種を保存していた子壇岳中腹の自然冷蔵庫）見学会」です。
（資料代含め 500 円　参加者は長袖長ズボン、軍手、長靴、帽子のスタイルで）
当館・地球を楽しむ会共催/青木村自然を守る会・青木村森林組合
青木村教育委員会

７．２１（日）午後１時～
小川原辰雄 Dr. による「ハチに刺されないために」講演会
年に一度は先生のお話を聞いて、上手にハチとつきあいましょう。
当館・青木村診療所/青木村森林組合・青木村後援

８．１０（土）午後８時～
「夜間昆虫と星を楽しもう」会　開催
十観山での蛾の新種を発見されている先生方も来られます。
星は科学クラブの渡辺文雄先生がご指導下さいます。早めに来られて、夕方の山を散策されるのも楽しいですよ。
当館主催・昆虫協会・地球を楽しむ会協力/青木村教育委員会後援

**９．２２（日）午後１時～**

**「昆虫と人間のかかわり」お話会**

近所に引っ越して来られた岩田先生のご縁で、友人の野中先生とお話しいただくことになりました。お楽しみに。

**野中健一先生**：（名古屋市）立教大学文学部教授・民族昆虫学

著書：「昆虫食の自然誌」「虫食む人々の暮らし」他

**岩田修二先生**：（青木村）/元立教大学教授・地理学

著書：「氷河地理学」他

当館主催/青木村教育委員会

**１０．？？（？）午後３時～**

恒例**「丸川尚子さんの唄のコンサート」**開催（大人 500 円）

秋の一日、今年もみんなで楽しいひと時を過ごしましょう。

日程につきましては、８月以降お問合せください。

**１１．３０（土）午後４時にて閉館**

**開館 10 周年ありがとう会　午後６時～懇親会（田沢温泉）**

（詳細はお問い合せください）

★☆　昆虫標本・書籍・文献等蔵書が増えております。お貸し出しはできませんが館内でゆっくりご覧下さい。

★☆　岩国市の故山田靖さんによる昆虫画ギャラリーは、展示入れ替えをしています。

★☆　昆虫・鳥・植物等の写真展は、常設コーナーを時々入れ替えています。

★☆　例年、５月連休あたりが山桜満開となります。

★☆　５月末にかけて、八重桜が満開になります。

★☆　オオムラサキチョウの羽化は７月中旬です。
今年も越冬幼虫が木を上ってくれるといいですね。

★☆　なお、さまざまなイベントをご希望の皆さま、ご相談に応じますので、ご連絡ください。
４月１日現在、森遊びお花見・星の運行とヒーリング・みんなで唄おう会・ＤＶＤ鑑賞会・コンサート等、各グループから、施設のご利用のお申し込みがございます。

★☆　開館は朝１０時～午後５時（１１月は４時）。入館料は大人３００円、中学生以下無料です。

本年も内外の各保育園、小中学校・学生・先生方をはじめ、育成会やさまざまなグループ様、県内外のリピーターの皆さま、昆虫愛好家の皆さま、多くの皆さまのご利用をお待ちしております。また、当館活動へのご協力やボランティア様の暖かいご支援をお待ちしております。

今年は、青木村の風穴見学会を予定している訳ですが、上田市在住の小駒はるみさんから素敵な寄稿を頂きました。小駒さんは、地球や人間の歴史に深く興味を抱き、徹底して調査、考察を深めておられる女性で頼もしい限りです。地球を楽しむ会のメンバーでもあり、当館活動にも暖かい応援を頂いております。蚕に興味を寄せて下さる女性が増えています。愉しいですね

# 黒船来航と蚕（かいこ）の卵

上田観光ボランティアガイドの会・地球を楽しむ会　小駒はるみ（上田市）

## 1.　はじめに

日本の近代化を支えた「産業遺産」が話題です。生糸関連では富岡製糸場や上田市の常田館、諏訪岡谷地域の文化財などが注目を集めていますが、一方で、その繭糸の起点である「蚕種」の存在は意外に知られていません。「蚕種」というのは蚕の卵です。そして蚕種には数百もの「品種」があるといわれています。うち「青白」「小石丸」はいずれも日本を代表する蚕品種で、ともに江戸期に上田藩領内で作り出された後、日本国内はもとより、殊に「青白」に至っては、飼育が海外にまで広まる超人気品種となりました。【注 1】

## 2.　蚕種とは

昨年の夏、山のクヌギ林で大きな黄緑色の芋虫を見つけました。体長 7-8 ㎝ほどでずんぐり、大型の蛾に育つことで有名なヤママユガ（山繭蛾)の幼虫です。別名を「天蚕」という野蚕の一種でもあります。それから秋冬の間、枯れ枝にぶら下がる黄緑色の繭を何度となく目にしました。宝石のような透明感を持つ幼虫と染料で色づけしたかのような濃い色の繭は、いつ見ても感銘を受けます。「野蚕」である天蚕も実際飼育はされていますが、現状その生育環境はなるべく自然に近づけたものです。希少性を伴うため、産物は非常に高価な織物素材となっています。この野蚕に対して「家蚕」がいます。一般に蚕（かいこ）として私たちがイメージするのはこちらでしょう。絹糸の産業的生産を可能にした養蚕専用の蛾です。幼虫なども一見皆白くて同じように思えますが、それも原種を離れた、実は、人の手による多様な「品種」の一つです。繭の形や大きさ、糸の量や質、虫自体の丈夫さなど、産業用昆虫ならではの特性に違いを持ち、「品種」の数は数百に及ぶといいます。繭色にしても、鮮やかな黄色や可愛らしいピンク等々と、決して純白ばかりではありません。交配に交配を重ね「開発・改良」が繰り返されてきたところは、牛や犬、植物の園芸用品種などにも似ています。このように養蚕の蚕品種は人工的な生産物ですから、江戸期にはすでに質の良い蚕の卵は「蚕種（さんしゅ、さんたね)」として商取引の対象になっていました。この生産・流通に携わったのが蚕種家という人々で、その商品は「産卵紙」という、台紙に産み付けられた、ほんのケシ粒のような卵の塊でした。「種紙（たねがみ)」とも呼ばれます。とはいえ、小さいながらも、それは繭糸の根源であり、完成品までの出来不出来に大きなかかわりを持ちますから、蚕種業は伝統的に幕府や藩、政府に重視をされ、統制管理下にあることが多い業種でした。

## 3.　「青白」種

「青白（せいはく)」種は、幕末から明治初めにかけて、ヨーロッパ向け輸出品として爆発的にヒットした蚕品種です。上田藩領上塩尻村（現長野県上田市）の藤本善右衛門など【注 2】が、野蚕と在来種を掛け合わせて開発をしたといわれています。大正時代の郷土誌『小県郡史』はその様子を「文政十年塩尻村藤本善右衛門が（※中略）蚕種製造の際、野蚕（桑蚕ともいう）の雄蛾飛び来りて春蚕白（又昔　※在来品種の一つ）の雌蛾と交尾したるものに、佳良なる黄繭を得たりき」とまとめ、特性を「青白は又昔に比して虫質強く、かつ冷気に耐えたり」としています。黄色い繭です。それから 30 年余り後の幕末期、黒船来航を経て横浜が開港されると日本の生糸（※絹糸のこと）が海外へと輸出されるようになります。それに続いて禁制を解かれ、まもなく一大ブームとなったのがこの「青白」でした。投機的ともいえる売り手市場は、欧州でとりわけ虫の丈夫さが切実

に求められたことによります。というのも、貴婦人の衣装でお馴染みですが、絹織物は当時のヨーロッパでも大事な産物でした。ところが産地のフランスやイタリアで肝心の蚕に病気が蔓延、養蚕業が壊滅状態に陥っていたのです。そんな折、ヨーロッパ人が目を付けたのが開国したばかりの養蚕国日本で、上塩尻村の「青白」について虫が大変丈夫なことを知ります。こうして「青白」の本場産地であった上田藩領内から横浜を経由し、大量の種紙が海を渡ってゆきました。『長野県史』によると、明治の初めごろの調査で上田藩領内から蚕卵紙 62 万枚の輸出を予定していたというのですが、同年の輸出高は日本全体でも 141 万枚だったとのことですから、上田藩だけでその 44%にあたる数量を見込んでいた勘定になります。価格については横浜港の高値が 1 枚あたり 7-8 両に達したとも。しかしながら、有名な細菌学者のパスツールが蚕の病気の原因をつきとめると、このブームは 10 年もたずに収束に向かいます。また、良質の蚕種が国外へ流失したことで、国産生糸の質が下がってしまったという弊害もありました。

**4. 「小石丸」種**

皇后様が育てられている皇居内の御養蚕所の品種として有名です。養蚕に興味のある人なら一度は耳にする名前ではないでしょうか？　宮内庁 Web サイトの御養蚕関係記事には「小石丸（こいしまる）」の名が度々登場します。引用しますと「近年、皇后さまがお育ての日本純産種の蚕である「小石丸」から採れる大変に繊細な絹糸が、古代裂（ぎれ　※豪華な織物）の復元に不可欠なものであることが明らかになり、正倉院宝物の復元や貴重な文化財の修理に用いられた」として、鎌倉時代の絵巻「（春日権現験記絵（かすがごんげんげんきえ）」の表紙の裂と巻緒が、「小石丸」による復元品として紹介されています。「小石丸」種もまた、江戸期の上田藩領内で作り出されたと考えられています。先の『小県郡史』によれば、「天保年間、伊勢山村小田中源右衛門は又昔（※在来品種名）の中より丸形の繭を選み、一新種を作り、その堅硬なる石の如しとて、小石丸と名づけたり」とあります。明治期には、「小石丸」の飼育は、すでに上田地域外に拡大しています。『長野県史』の掲げる例では、伊那郡、更級郡の村において「小石丸」は養蚕の中核品種です。さらに数年後の「内国勧業博覧会」で「小石丸」は人気を博し、この成功がいっそうの普及を決定づけたといわれています。「勧業博覧会」の開催は政府が推奨した産業振興政策の一環で、「博覧会」というより、今でいう「見本市」のような実務的な影響力を持っていたようです。

**5.　おわりに**

天蚕に出会った山とは、私が子供のころカブトムシやクワガタムシを取りに行った近所の裏山、むしろ裏庭のような極身近な場所だったはずなのですが、意外なことに当時、この幼虫の存在にはまったく気付きませんでした。山の植生はとりたてて変わっておらず、「そういうつもりで見る」かどうかで、こうも見えるものが違うのかと驚かされました。お目当ての昆虫を探しに山にはいるわけですから、捕まえたりしないまでも、していることはまったく一緒ですね。

【注 1】長野県上田地域の蚕種の歴史については、『上田市誌 15 巻　蚕都上田の栄光』2003 年、上田小県近現代史研究会『蚕都上田ものがたり―蚕種業を中心として―』2008 年などにまとめられています。

【注 2】「此頃上野国縁野郡大塚村なる織茂周平の手代政八もまた小顆にして糸量多き黄繭種を作る。当時信濃、上野、下野、甲斐、奥州に此種を広めしは善右衛門と政八との両者にして、その種類を青白といえり」（小県郡役所『小県郡史余編』大正 12）

〒386-1601 青木村田沢 1875-6　　信州昆虫資料館

Tel　0268-37-3988　Fax　37-3964　　E-Mail　kontyu−s@ypost.plala.or.jp